

「あおもり家庭教育アドバイザー養成講座 第4回」

中南地区：令和6年9月 5日（木）弘前市総合学習センター 受講者12名

下北地区：令和6年9月12日（木）下北文化会館 受講者 6名

1 内 容

【講 義】「気になる子どもの理解と対応」

講師 青森県発達障がい者支援センターDoors

センター長 ぶんばい あつし 氏

【演 習】「あおもり親楽プログラムⅡ」

進行 県総合社会教育センター職員

【経 歴】

6年間、宮城県仙台市の知的障害者更生施設で勤務したのち、平成23年に社会福祉法人 豊寿会 妙光園に勤務。妙光園では、放課後等デイサービスで自閉症支援や管理者等を歴任し、平成26年に社会福祉法人 豊寿会 理事長、妙光園 園長に就任。平成28年より、社会福祉法人 豊寿会 青森県発達障がい者センターDoors センター長に就任している。

法人経営・運営の他に、三八管内スクールカウンセラー等を兼任し、発達に偏りのある当事者及び保護者の相談の他、学校現場や保育園等で子どもとの関わり方に関するコンサルテーション、発達障害や子どもの発達、子育てに関する講演等を行っている。



【講義要旨】

「気になる子どもの理解と対応」

- ・子どもと関わる上で最も大切なことは、子どもの目線（目と耳と心）で物事を観察し、考えることである。
- ・子どもたちが求めているのは専門的な技術よりも、母性的な関わりである。指導しても何度も問題行動を繰り返す子どもたちの背景には、乳児期、幼児期、児童期で獲得すべき発達課題とテーマを乗り越えられなかった、親に安心して気持ちを出せなかったなどがある。
- ・子どもの関わりに必要な3つの基地には、「安心基地」「安全基地」「探索基地」がある。
- ・「発達障害」とは日々の生活の中で、多くの他者とは違う感じ方や考え方をすることで不安や緊張・孤独等を常と感じ、生活がとてもしづらい状態をいう。人と違う感じ方や考え方（発達に凸凹あり）でも適応できていれば「発達障害」の状態ではないし、病気でもない。
※発達の凸凹とは、自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如・多動症（ADHD）、限局性学習症（SLD）など。
- ・保護者との連携で大切にしたいことは、保護者も葛藤していることを理解し、共感しながら何を求めているのかを把握していくことである。

2 受講者の感想

- ・子どもの目線で気持ちを考えることの大切さがよく分かりました。こちらに気付きがあれば叱る、注意する回数が減るので、大人と子どもの関係が悪くならないと思いました。また、子どもの気持ちに蓋をするような愛のない言葉がけはしないよう心に刻もうと思います。
- ・支援者としては、耳が痛い内容もありましたが、だからこそさらに色々な物事を深く考えて、様々な視点から子どもを中心にしていきたいと思いました。発達の障害があるなしに関係なく、その子が安心してその子らしくいられることを大切にしたいです。
- ・子どもに対する自分の行動を考え直すことができました。こうして関わってあげたい、こうしてあげたいと思うことがたくさんあり、仕事に対しての気持ちが変わりました。